

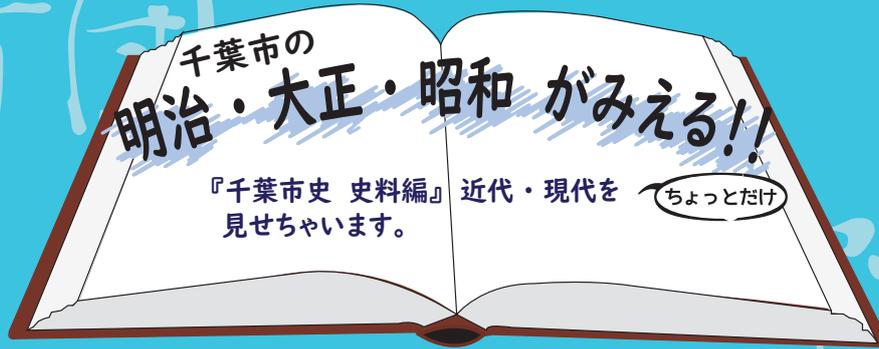


# 編さん便り

千葉市の明治・大正・昭和がみえる!!  
 第14回 警防団とは  
 ——千葉市の事例から……1-3  
 令和6年度新収蔵史料のご紹介  
 ～樋口誠太郎氏収集史料より～……4

Chiba-shishi News Letter NO.34 2025.3

# 警防団



# 防空

連載中の「千葉市の明治・大正・昭和がみえる!!」第14回は、千葉市史編集委員会委員長の池田順先生の「警防団とは——千葉市の事例から」です(2～3頁)。

1931(昭和6)年の満州事変勃発以降、日本という国家全体が戦争へ向けて突き進むなか、人びとを戦争へ動員し、協力させる役割を果たした「銃後の諸団体」のうち、警防団に焦点をあてて、ご執筆いただきました。千葉市での組織の成立過程を含め、地域で果たしていた役割など、詳しく解説いただきました。

今回の原稿の冒頭にあげられた一枚の絵画、これは『千葉市空襲の記録』という書籍の口絵に掲載された、「忘れた日 一千葉空襲」と題して描かれたものです。いまからおよそ80年前の1945(昭和20)年7

月7日、千葉市街上空にB29が飛来、市街地へ焼夷弾を投下しました。「七夕空襲」と呼ばれる空襲です。市街は一面焼け野原と化しました。いまや、この出来事を経験した人は少なくなり、我々は残された当時の人びとの証言や、こうした絵画など「記憶の記録」によって、当時のようすを思い描くことしかできません。しかし今回ご執筆いただいたように、人びとの「記憶」と残された「史料」双方から、当時の社会のありようを考え、次世代へ伝えていくことができるのです。

現在の千葉市域の明治末期から大正・昭和戦前・戦中期のようすを具体的に示す史料426点を収録した『千葉市史 史料編 近代2』は、千葉市立郷土博物館で購入できます。B5判、3,000円(税込)。



古い書付や写真、民具類など、台風などの自然災害やそのほかの事情により濡れてしまったり、汚れてしまった資料がありましたら、その対応のお手伝いできればと思います。

これらを捨ててしまう前に、可能であれば、**市史編さん担当**(連絡先は4頁参照)までご一報ください。お宅に残る歴史や思い出を、少しでもよい形で後世に残していけるよう、できる限りのお手伝いをさせていただきます。

## 第14回 警防団とは——千葉市の事例から

千葉市史編集委員会委員長 池田 順



写真 忘れたい日——千葉空襲 日暮幸子会員一九七五・一一作品（第二八回県展入選）

千葉市空襲を記録する会編集・発行『千葉市空襲の記録』（1980年）口絵より

上の絵画は、1945（昭和20）年7月7日の「七夕空襲」により焼野原と化した千葉市中心街の光景を描いたものです。黒い制服の男たちが遺体をトラックに積み込んでいます。彼らは警防団の団員です。遺体は、現在の市営桜木霊園に運ばれ、共同で火葬に付されました。では、警防団とはどのような組織だったのでしょうか。今回は、千葉市の事例をとおしてこの点を明らかにしたいと思います（千葉市域の警防団に関する史料は、『千葉市史 史料編11 近代2』第2編第3章第1節に掲載されています）。

警防団は、1939年1月に公布された警防団令によって、従来、水災・火災の警戒防衛業務を担当してきた消防組が、防空業務を担当してきた防護団と統合され創設された団体です。消防組は、1894（明治27）年2月に

制定された消防組規則に基づき、それまでまちまちだった消防組織が、各市町村に統一的に結成されたもので、その活動は警察の指揮下におかれていました。一方、防護団は、1931年の満州事変以降、陸軍の指導のもと、大都市を中心に防空演習の実施を機会に設立され、しだいに全国の市町村に広がっていきます。その結果、同一の市町村内に指揮・指導系統が異なり業務の重複する二つの団体が併存することになり、ときに対立・衝突が生じたのでした。そのため、1937年7月に始まった日中戦争の長期化により、総力戦体制の整備が急務とされると、政府は、防空、水災・火災の消防などに関する業務の統一をはかり警防団を新設したのです。警防団は、警察署長の指揮監督下、市町村の区域に設置され、団員に

は、「一朝事アルニ際シテハ身ヲ挺シテ難ニ赴ク覚悟」（警防団員服務規律）などが求められました。

千葉市の消防組は、消防組規則制定後いくたびか組織の改変が行われますが、県営水道の開通にともなう1936年6月の改変の結果、本部を含む10部、人員154人という編成となります。その後、1937年2月の近隣四町村との合併により、組織が拡大され、人員も大幅に増大します。千葉市の防護団は、1937年4月の防空法の公布を契機に設立されました。同法の公布を受け、9月に関東防空演習が実施されることになると、千葉県は、6月に発表した同演習の規約のなかで、国民防空（国民が行う防空業務）の訓練のため、防護団の結成を指示し、各市町村に協力を求めたのです。これにより、千葉市でも急速各地域に防護団が結成されます。連合防護団長には市長永井準一郎が就任しました。防護団役員は消防組役員が兼任するケースが多かったのですが、実動部隊の中核は在郷軍人が担ったようです。防護団員は市全体で約5,000人といわれ、たびたび実施されるようになった防空訓練の第一線で活動します。

千葉市警防団は、こうした実情にあった消防組と防護団の統合により1939年4月に発足しました。発足当初の編成は、おおよそ、本部のほか9分団を地域別に設置し、各分団の下に防空・消防・救護・防毒の各部を置くというもので、定員は2,816人でした。しかし、分団ごとに組織のあり方が異なり複雑だったため、実際の運用や経費の関係から見直しが必要とされ、1940年度に、基本的に同じ編成ですが、組織の整備とスリム化をはかり、定員を1,460人とする改変が行われます。発足時の警防団長には市会議長岩瀬甚蔵が就任し、9名の分団長のうち7名が市議員（うち1名は元議員）でした。旧消防組関係者は、前消防組頭が副団長に就いたほか分団役員に多く名を連ねています。団長・副団長・分団長以外の団員は、18歳～55歳で身体強健な者から任命するとされています。

その後、警防団の編成は、空襲の危機が差し迫っていた1943年に、従来の分団を連合分団とし、連合分団の下に数個の分団を置き、さらにその下に町内会を

区域とする班（班長は町内会長）を設置するように改変されます。千葉市では、内務省が示した方針に基づき、1940年11月に、市の補助的下部組織として、従来の町・丁目・行政区の区域などに、全戸加入の町内会が結成されました。そして、町内会の下に10戸内外の戸数からなる隣組が置かれ、隣組には、隣保互助の精神により、空襲による火災の防火に力を尽くす家庭防空群としての役割が負わされていました。そこで、町内会—隣組（家庭防空群）と警防団の末端を一体化し、防空態勢の連携強化をはかったのです。それとともに、警防団員が基幹団員と特別団員に区分されます。召集や軍需工場等への徴用の増大などによって警防団の担い手が不足するなか、旧来の団員を基幹団員とし、新たに18歳～55歳の者からできるだけ多数を特別団員に任用することにより、空襲時に町内会ごとの班で陣頭に立って防空活動にあたらせようとしたのです。警防団の定員は、1943年11月において、基幹団員1,191人、特別団員1万1,700人でした。翌年1月には年齢制限が撤廃され、団員の高齢化が進みます。

このような警防団と家庭防空群を核とする「国民防空」の態勢は、実際の空襲に際してほとんど無力なものでした。千葉市は、防空訓練の要綱で、焼夷弾に対し隣組において協同で早期の防火に努め、大量の煙や火焰を恐れず、あきらめず冷静に処置するよう指示します。しかし、七夕空襲では、たえまなく落下する無数の焼夷弾に対し、防空訓練で教え込まれた、火叩きで火の粉を払い、多量の水、濡らした筵、砂・土などをかけるといった消火法では、まったく役に立たず、焼夷弾の落下で発生した火災は強風にあおられ、たちまち燃え広がりました。警防団の消火能力では、こうした事態に手の施しようがなく、猛火のなかを逃げまどう人びとに向かい、団員が「逃げるんじゃない、火を消すんだ」と怒鳴る（空襲体験者の証言）くらいが精一杯でした。



# 令和6年度新収蔵史料のご紹介

## ～樋口誠太郎氏収集史料より～

令和6年(2024)10月、樋口誠太郎氏が収集した史料をご寄贈いただきました。

樋口氏は長く郷土の歴史を研究されており、千葉市史研究講座や郷土博物館の歴史講座でもご講演いただきました。

今回寄贈を受けた史料は、写真アルバムや絵葉書などです。特に写真が多く、樋口氏ご自身が史跡散策の講師をされた時と思われる写真もみられます。千葉市内の風景を撮影した写真も多く、今回はそのなかの一枚を紹介します。

下の写真は平成9年(1997)1月24日に撮影されたものです。建設中の千葉都市モノレールが写っています。現在の県庁前駅辺りから千葉駅方面に向かって撮影されています。この区間の千葉都市モノレールが開業したのは平成11年(1999)3月24日ですので、開業の約2年前の状況を写したものです。橋脚はできあがっているようですが、レールは途中までしか設置されていなかったことがわかります。写真の向かっ

て左側は建て替え前の読売千葉のビル(平成29年に現在のビルに建て替え)、その先には富士火災(現在のAIU損害保険株式会社)の看板が見えます。右側にはNHK千葉放送局のビルがあります。NHK千葉放送局は平成23年(2011)12月に千葉港に移転し、この跡地には現在はマンションが建っています。今から約28年前の写真ですが、現在とはずいぶん様変わりしてしまっています。

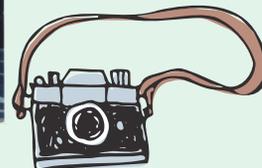
千葉市内を撮影した写真はほかにも、建設中の千葉県立中央博物館・千葉市立青葉病院、また千葉都市モノレール関係では今回紹介したもの以外にも建設中の千葉駅、都賀駅での開通式の写真などもあります。

まだ整理作業は始まったばかりで、年代や撮影場所などはっきりしないことが多くあります。今後整理作業を進めていき、何かの機会に改めてご報告できたらと思います。

改めまして、ご寄贈いただきありがとうございました。  
(市史編さん担当 笹川)



現在の県庁前駅付近の写真



あとがき

ちば市史編さんより34号をお届けします。連載中の「千葉市の明治・大正・昭和がみえる!!」。本号では、池田委員長にご執筆いただきました。国家が戦争に人びとを動員するために何を利用したのか。現在の社会の状況を鑑みるに、戦後80年を経て、改めて考え直す必要がありそうです。

10年に一度の大寒波が訪れた今年、毎年大なり小なりさまざまな出来事が起こっていますが、その記憶と記録を、教訓を添えて次代へ継承していけたらと思っています。(え)

ちば市史編さん便り 34号 Chiba-shishi News Letter No.34

発行日 2025年3月28日

編集・発行 千葉市立郷土博物館 市史編さん担当

〒260-0856 千葉市中央区亥鼻 1-6-1

印刷 株式会社みつわ